HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	史料から探る黒死病 ： イギリスを中心に
著者	白岩，千枝; SIRAIWA，Chie
引用	年報新人文学(07)：322-379
発行日	2010-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

[論文]

史料から探る黒死病

―イギリスを中心に―

白岩 千枝

はじめに

黒死病とは、十四世紀半ばからヨーロッパを断続的に襲った疫病を指す。この疫病は近代医学によってペストと呼ばれる伝染病の一種であることが明らかにされた。本稿は、黒死病の流行を当時のイギリスの人々がどのように受けとめたのかについて、残されている史料から探ることを目的としている。

ペストは、中世末期のこの時期だけに限定して発生した疫病ではない。ヨーロッパでは古代末期や中世初期にも猛威をふるったことが知られていた。たとえば、記録された最初の流行といわれるのが五四二年の春にコンスタンティノープルを襲ったペストで、時の皇帝にちなんで「ユスティニアヌス大帝の

ペスト」と呼ばれる。この当時のコンスタンティノープルの推定人口は三〇万人で、その二分の一から三分の一がこれによって死亡したと考えられ、最盛期には一日だけで一万人もの死者が出たとされる(1)。これ以後六世紀末までペストは波状的にコンスタンティノープルを襲い、これが「東ローマ帝国の崩壊を早めた」ともいわれる(2)。

ペストは近代に入っても流行した。特に、王政復古期の一六六五年にロンドンを襲ったペストは「大ペスト」'Great Plague of London'と呼ばれ、翌年秋までにロンドンの人口の五分の一がこの疫病で死亡したとされる。この流行は、ロンドンという限られた範囲内での流行ではあったが、ロンドンの発展とともに急増した人口と、不衛生で密集した住宅環境が大きく影響し、ロンドン当局による家屋の閉鎖や隔離、埋葬などの措置が取られたが、効果はなかった。ペストの流行に歯止めをかけたのは、一六六六年九月二日の未明に発生しやがてロンドン市街をほぼ焼き尽くすまでになった大火災であり、ペスト菌を運ぶ鼠をも焼き尽したとされる。また、クリストファ・レン Christopher Wren を中心とした再建計画に基づく街路の整備や建築規制も、ペストの流行を封じ込める上で一定の役割を果たした。

ペストはこのように古代末期から知られている疫病であるが、その影響の大きさの上で、最も重要な流行は本稿が取り上げる中世末期の黒死病である。しかし、その影響の大きさはよく知られているのではあるが、黒死病の実態やこの時代の人々が黒死病をどのように捉えていたのか、町や村ではどのような対応が取られ、人々はどのように生き延びたかなどの問題になると、必ずしも明らかとはいえない。それは、特にイギリスについては、これまでの研究は、黒死病そのものよりも、その結果としての人口減少がもたらした社会経済的な影響にもっぱら焦点があてられてきたからである。

戦後のある時期まで、十四・十五世紀イギリスの社会経済史研究は日本の研究にも多大な影響を与えた。城戸氏は、一九七三年に刊行された『イギリス史研究入門』において、十四・十五世紀のイギリス史、特にその社会経済的発展については、「現在二つの代表的見解が対立している」とし、M・M・ポスタンを代表とする第一の見解と、E・A・コスミンスキーを代表とする第二の見解を紹介している(3)。それによれば、第一の見解は「経済の与件」として人口動態を重視する観点から、黒死病による人口減少を中世末期における経済「不況」の誘引として強調する。これに対して第二の見解は、この時期の社会経済構造の質的転換を強調し、この質的転換に封建制から資本制への社会構成体の移行の第一段階を見ようとする。第二の見解はイギリスでは少数派であったが、わが国においては十四・十五世紀イギリス社会経済史の研究に強い影響を与え、社会経済の質的転換を促した要因として領主経済に対する農民経済の優位の確立、農民の階級闘争が重視された。そして黒死病による人口減少は、賦役の金納化を推し進め、農民に有利な力関係をもたらした要因とされたのである(4)。このように、戦後、活況を呈したイギリス史研究においては、どの見解の立場をとるにせよ、黒死病は社会経済史の中に組み込まれ、人口減少をもたらした重要な要因とされてきたが、この疫病そのものが、あるいはその社会的影響が研究対象となることはなかった。

その後イギリスでは、M・M・ポスタンの築いた人口史研究は、ピーター・ラスレット Peter Laslett とエドワード・リグリー Edward Anthony Wrigley を中心とする「ケンブリッジ・グループ」と総称される歴史人口学研究に結実し、欧米を中心に荘園裁判記録の分析に基づいて黒死病期の実際の人口動態を明らかにしようとする研究が現れてきた。その先駆者がJ・A・ラフティスである。彼は、ハンティ

ンドンシャーにあるラムゼイ修道院領のアプウッド、ブラウトン、アボッツ・リプトン、ウィッソウ、ワーボーイズの五村を対象に、一二七〇～一三五六年における二三六四所帯、四八一六人に関わるおよそ二〇八〇〇件の文書を史料として、黒死病前後の村落の動向を検討し、各村で平均一五％から二五％の家が断絶したと結論した。また、領主直営地では賦役の不履行が目立ち、その賦役が次第に金納化されていったことを明らかにした(5)。Z・ラジは、バーミンガムのヘイルズオーエン教区の荘園裁判記録から、そこの一二七〇～一三四八年におけるほぼ二〇〇の農民家族の動向を検証し、黒死病流行前後の農民の実態を検討した。農民にとって保有地は生活を支える基礎であったから、流行後に空白になった土地にも保有者が補充されていたことを明らかにし、農民は土地に愛着を持ち続け、村共同体も生き続けていたと結論づけた(6)。このような荘園裁判記録の分析は、教区簿冊が利用できない中世末期に関する人口動態研究の隙間を埋めるものとされ、事例研究を積み上げることによって黒死病期の村落や家族の復元をある程度可能にするものと期待されている。

日本では、十四・十五世紀イギリスの社会経済史研究は、その後ほとんど影をひそめてしまった。しかし、黒死病については、近年、蔵持氏がおもに大陸を対象にペストが及ぼした影響やペストに対する都市当局の対策、衛生対策を中心に考察し、見市氏は十七世紀のロンドンでの大ペストを対象に一般向けの概説を書いている(7)。また、石坂氏と佐々木氏は、イタリアやドイツを対象に修道士が残した説教例話や年代記を丹念に読み解き、黒死病に対する人々の反応や社会の変化の解明に着手している。石坂氏は、数多くの説教例話や年代記、書簡を翻訳することに重点を置き、さらに解説を加えることで当時のイタリアの人々が受けた影響を検証している(8)。佐々木氏は、ドイツに残されている年代記から

黒死病とユダヤ人迫害の二つの事件の前後関係を検証し、ユダヤ人迫害、黒死病という順序で起こっていたことを明らかにしている(9)。これは、従来、黒死病の随伴現象としてユダヤ人迫害が見られてきた古い動向から抜け出す画期的な研究である。このように、黒死病に対する本格的な研究がようやく始まったといえる。

イギリスでは、黒死病をテーマとした史料集の刊行が相次いでいる。特にマンチェスター大学出版会から刊行されたR・ホロック編の史料集には、黒死病期のイギリス関係史料がほぼ網羅されている(10)。本稿は、これらの史料集に収録された記録、書簡などを読み解き、黒死病流行期のイギリスの人々が黒死病をどのように受けとめ、対応したのかを検証したい。したがって、この研究には重大な限界がある。その第一は、残された史料のほとんどが聖職者によって書かれたものであることから、人々の認識といっても、実際には教会の認識であることである。その第二は、第一次史料を見ているわけではなく、編集された、しかも現代英語訳された史料を用いていることである。このような限界を踏まえた上で、史料から見えてくる人々の姿を明らかにしたい。

第一章　黒死病をめぐって

第一節　疫病の名称

十四世紀半ばにヨーロッパの国々を荒廃させ、イギリスでも猛威をふるったペストは‘Black Death’と呼ばれ、日本では「黒死病」と訳されている。しかし、‘Black Death’は同時代人が用いた名称ではない。*Oxford English Dictionary*（以下、*OED*）によると、‘Black Death’に相当する語が現存史料にあらわれるのは、十六世紀のスウェーデン人とデンマーク人による年代記の中に用いられたのが最初である。これをドイツで一七七三年にシュロッツァーが‘der schwarze tod’というドイツ語をあて、その後一七九四年にスプレンガーがそれを一般的な用語として用い、このドイツ語から‘de zwaarte dood’（オランダ語）、‘the black death’（英語）、‘la peste noire’（フランス語）が派生したという。イギリスでは、マーカム夫人（本名エリザベス・ペンローズ）が一八二三年に出版された『イングランド史』のなかで百年戦争に触れ、「エドワード（三世）のフランスでの成功は the black death と呼ばれるほど恐ろしい疫病（pestilence）によって六年間中断されることになった」と書いたのが初出とされている。その十年後にB・G・バビントンがドイツのJ・F・E・ヘッカー著の医学書 *Der Schwarze Tod* を『14世紀における黒死病』*The Black Death in the Fourteenth Century* という書名で翻訳した[11]。このように、‘Black Death’という名称は近代になって付けられ、イギリスでは十九世紀に一般化したとされている。

中世末期に流行したペストは、なぜ、‘Black’と形容されるのか。これについては、ジョヴァンニ・ボッカチオの『デカメロン』の次の一節がよく引用されて説明されてきた。

「東洋におけるごとくに、避けられぬ死の兆候として初めに鼻から血を出したのとは異なって、病気の初期の段階でまず男女ともに鼠蹊部と腋の下に一種の腫瘍を生じ、これが林檎大に腫れあが

るものもあれば鶏卵大のものもあって、患者によって症状に多少の差こそあれ、一般にはこれがペストの瘤と呼び習わされた。そしていま述べたように、身体の二箇所から、死のペストの瘤はたちまちに全身に広がって吹き出してきた。その後の症状については、黒や鉛色の斑点を生じ、腕や腿や身体の他の部分にも、それらがさまざまに現われて、患者によっては大きくて数の少ない場合もあれば、小さくて数の多い場合もあった。こうしてまず最初に、ペストの瘤を生じ、未来の死が確実になった徴候として、やがて斑点が現われれば、それはもう死そのものを意味した」(12)。

このように、感染した患者の全身にあたかも死の宣告のように現れる「黒や鉛色の斑点」によって黒ずんだことから'Black'と称されたと一般には説明されてきた。しかし、見市氏も言うように、「病原菌によって侵された身体は大なり小なり黒ずむものであり、とくに、天然痘の方がむしろ「黒死病」と呼ぶのにふさわしい状態になるというのが実際のようである」(13)。*OED*でも、'Black'の由来は不明としている。

黒死病が流行した当時のイギリスでは、この病気を「疫病」または「伝染病」を意味する'pestilentia'、'pestis'、'epidemia'や、「死亡」を意味する'mortalitas'などの言葉を使って表している〔史料12―R・ホロック編の史料集の史料番号。巻末資料紹介参照〕。

この表現はイングランドに限らず、アイルランドでも同じである。〔史料23〕にあるように、キルケニーにあるフランシスコ会の修道院がこの疫病に襲われ、ひとり生き残り「これからやってくる死を死者たちの間で待っている」J・クリンが羊皮紙の隅に「真実として聞いたこと、見たことを書き留め

た」。そのクリンも‘pestilencia’を用いている。スコットランドでもアバディーンの司祭で一三六三年頃死亡したジョン・オヴ・フォーダンがこの疫病について、‘pestilentia’、‘magna mortalitas’（大量死）という言葉を用いている〔史料24〕。

このように、中世末期にはペストを特定する語はなかったと推測され、伝染性の病気や死亡率の高い病気は、その種類の区別なくこれらの語で表されたと思われる。これらの語は中世末期に限らず、中世を通して使われている[14]。中世を通して人々には、疫病の種類がペストであったのか、天然痘であったのか、あるいはコレラか赤痢かを区別するすべもなく、すべては「疫病」と受けとめられ、「大量死」を意味したということであろう。石坂氏によれば、イタリアでも、この疫病は、「疫病」‘la peste’、「大量死」‘grandis mortalitas’、「大疫病」‘grandis pestis’などと呼ばれたという。同氏は、日本語文献のなかで史料に出てくる当時の証言や記録を紹介あるいは引用する際に、「ペスト」と訳したり、「黒死病」の語が用いられていることを批判する[15]。本稿でも史料を翻訳するにあたっては、当時の人々の語をそのまま訳すことにする。なお、ラテン語の‘mortalitas’は英訳書では、通常は‘plague’の語があてられる。この場合の‘plague’も、今日の意味である「ペスト」ではなく、「疫病」の意味である。

第二節　人口減少

十四世紀半ばからヨーロッパを襲った黒死病によって、莫大な数の人々が死んだことは確かである。しかし、当時は死亡者数の記録が義務付けられていなかったため、黒死病で死んだ人々について正確な

数字を知ることは不可能である[16]。

イングランド全土の人口の推定を可能とする史料は、一〇八六年のドゥームズデー・ブック Domesday Book と一三七七年の人頭税報告書 Poll-Tax Returns だけである。前者は、一〇六六年のノルマン・コンクェスト前後における所領の実態調査を記録したもので、州ごとに、保有者の名前、保有関係、保有面積、犂の数、自由農民・非自由農民の数、共同地（森林、牧草地、放牧地）の面積、各所領の評価額、納税額などが記録されている。後者の人頭税報告書とは、王室の財政的必要から一三七七年以後、全国的規模で一定年齢以上の全住民（僧侶、乞食を除く）に課せられた人頭税を徴収する際に作成された記録である。各地それぞれの記録者によって記録様式が異なるために多様ではあるが、一般に村落ごとに担税者の氏名と、地域に応じて課せられた徴収税が記載されている。若干の地域では、担税者の身分や職業、担税者相互の家族関係までも記録されている場合があることから、わが国では「はじめに」で触れた「封建制から資本制への移行」の研究において、船山氏を中心に農民経済のもとでの「社会的分業」の実態を示す史料として研究されてきた[17]。近年のイギリスでは、これもすでに触れた人口動態史研究の分野で活用されている史料である[18]。

全般的長期的な人口動態は、この二つの全国的史料を中心に、多くの局地的史料を援用して作られている。そのなかでも信頼度の高い統計として利用されてきたのが、J・ハッチャーの数字である。それによれば、イングランドの人口は一〇八六年には一七五万人から二二五万人の間と推定される。それが十二・十三世紀の間に拡大し続け、一三〇〇年頃には最大に達したと思われている。人口は、一三一四～五年の大凶作・飢饉の頃からすでに減少を始めていたが、一三四八年にも依然として四五〇万から六

○○万人の間の水準を保っていた。しかし、一三四八～五〇年の間に襲った黒死病によってイングランドの人口は一挙に三〇～四五％減少し、さらに一三七七年までに二五〇万から三〇〇万人程度にまで落ち込んだとされる。人口が再び増加し始めるのは十五世紀半ば以後のことであり、黒死病直前の水準に戻るのは十七世紀になってからである[19]。

（一）「三分の一」

黒死病期の人口減少について、同時代人の著作にあたると、住民の「三分の一が死亡した」などの記述が目に付く。たとえば、現在のベルギーにあるトゥルネーのセント・ジャイル修道院の院長 Gilles li Muisis は、一三四八年に疫病についての報告を残している。そこでは、「東方で始まったこの疫病は、インドを通ってキリスト教と異教の国々すべてを襲い、死亡率は非常に高く、住民の三分の一が死亡した」と書いている〔史料6〕。アバディーンの司祭ジョン・オヴ・フォーダンも「人類の三分の一が殺されたほどである」と書いている〔史料24〕。また、現代の研究者の多くも、たとえば、カルロ・M・チポラ Carlo M. Cipolla が「黒死病は三年ほどの間に、ヨーロッパの人口のほぼ三分の一を殺してしまった」と述べているように、「三分の一」死亡説は根強い[20]。しかし、これらの研究者は特にその根拠を挙げてはいない。

見市氏は、「三分の一」という数値は、「ヨハネの黙示録」に由来すると推測する[21]。確かに、その第八章には陸地と樹木の三分の一が焼き尽くされ、海と海中に住んでいるもの、船の三分の一が破壊され、三分の一の数の川に「苦よもぎ」と呼ばれる星が落ち、水という水の三分の一は苦よもぎのように

苦くなったために、その水を飲んだ多くの人間が死んだ。また、太陽、月、星の三分の一が打ち壊されたという。さらに、第九章にはユーフラテスの大河のほとりに縛られている四人の天使が、人という人の三分の一を殺すために解き放たれたとある。しかも天使たちの騎兵大隊の馬の頭はライオンのようで、口からは火と煙と硫黄を吐き出しており、この三つの災いによって、人という人の三分の一が殺されたのだという(22)。このように、「ヨハネの黙示録」には「三分の一」という表現が数多く見られる。おそらく、黒死病当時の人々、特に聖職者らは、黙示録の記述と黒死病の被害を結びつけて考えたのであろう。その結果、歴史学の伝統として、当時の人口の三分の一が死んだ、とされてきたのである。

いずれにせよ、これらの数値や「三分の一」という表現は黒死病がもたらした影響の大きさを知る一つの手がかりにはなるが、推測している数値から人口減少の大きさを割り出しているために、この情報をそのまま鵜呑みにすることは危険である。

(二) 最近の研究から

黒死病による人口減少を考える上で重要なことは、疫病が何度も発生を繰り返したことであった。一三四八～九年に流行しただけでなく、イングランドでは、エドワード五世(在位一四八三)の治世末の一四八三年までに実に十七回も流行が繰り返えされている(23)。特に、エドワード三世(在位一三二七～七七)の治世には、四回(一三四八～九年、一三六二～三年、一三六九年、一三七五年)も発生している。それに加え、先に触れたように、ヨーロッパでは十四世紀初頭から天候不順による凶作、飢饉が続き、一三一五～七年にはその被害が最高潮に達したとされる。その後二〇年にかけて、飢饉の波は南

下し、地中海沿岸まで広がった[24]。飢饉に苦しんでいたところへ黒死病が襲ってきたのである。そのため、人口減少の原因を黒死病の流行だけに帰することはできない。

しかし、〔史料13〕のように黒死病当時の記録には、「病気の人の看病や死んだ人を埋葬するのに必要な人がほとんどいない。生き残った女性の多くは、何年もの間、不妊の状態が続いた」という文言が繰り返されている。黒死病は、初めの流行だけでも高死亡率であったが、その後繰り返された流行によって出生率も低下したと推測される。凶作と飢饉で体力、免疫力ともに低下していたところへ年少・老人のみならず、青年も高伝染性の疫病に罹ったのである。これによって婚姻者数が減少し、将来子供を産むはずの人々がいなくなり、また多くの婚姻が配偶者の死によって中断された。こうして人口を維持するのに十分な子供が生まれないという状況をもたらし、人口減少に拍車をかけたのである。

最近の研究は、黒死病による死亡率について「三分の一」よりも高い数値を示している。たとえば、J・アバースは、最も正確に教区内の司祭の死亡を記録しているイングランド司教記録簿を分析して平均死亡率を四五％としている。農民の死亡を記録したマナー史料もすべて四〇％から七〇％の死亡を示しているとする。また、フランスやイタリア、スペインでの平均死亡率についても、教区簿冊、課税査定簿、世帯調査報告書、司教記録簿などは四五～六八％という数値を記録している。したがって、「平均死亡率を三分の一とする評価は少なくても五〇％にまで上方修正されなければならない」とアバースは主張する[25]。E・キングも、ヨーク大司教区内の教区司祭について、五三五教区内のうち二三三の司祭が死亡しているということから、平均死亡率は四三％であるとしている。さらに、リンカーン司教区では、教区司祭の総数に対して空席になったのは四〇％であったという[26]。

J・アバースが言うように、「中世の数的評価については、大げさにいう傾向があるためいつも用心して取り組まなければならない」。また、特定の都市や修道院などに断片的に残されている史料から推測する数値は様々で、地方による差異も少なくない。しかし、最近の研究は、従来考えられてきた「三分の一」よりも高い死亡率を示している。「生き残った人の数が少なくて死んだ人を埋葬することができない」と当時の年代記作者が書き残している〔史料10〕。当時の人々にとって経験したことのない「大量死」だったことは確かであろう。

第二章　流行の経路

ペストは、もともと局地的に限られた病気であり、ヒマラヤの丘陵地帯やユーラシアのステップに存在し、そこでは、ペストのバチルス菌が野生のマーモットやげっ歯類動物の暖かい巣の中で無限に生き残ることができたとされる(27)。黒死病が発生したのは一三三八年のモンゴルのステップ地帯である。それが、モンゴル帝国の陸路ネットワークを通って一波がまず西へ向い、ウズベキスタンのタシケント、それからアラル海、カスピ海北岸で猛威をふるいながら、ヨーロッパへの玄関口となる黒海北部に位置するクリミア半島のカッファに到達した。そこからジェノヴァのガレー船が各地に寄港しながらペストをもたらしたのである。シチリア人の年代記作者、ミカエル・ダ・ピアッツァ Michele da Piazza は、黒死病がヨーロッパの海岸に最初に到達した様子を次のように記している。

「主の生誕から数えて一三四七年経った十月の、その月の一日あたりに、十二隻のジェノヴァのガレー船が、悪行ゆえに彼らに下された神の復讐から逃れて、メッシーナ港に立ち寄った。彼らは、ペストをガレー船とともにもたらした。それは、彼らの身体の奥の奥までに達して、もし誰かが彼らに話しかけただけであったとしても、致命的な疫病に伝染させられ、逃れることのできない差し迫った死をもたらした」(28)。

翌二、三年のうちに、この疫病はヨーロッパ大陸や島々のほぼ全域に広がることになった。J・アバースによれば、ヨーロッパのなかで黒死病の影響をまぬがれたのは、ポーランドとボヘミアだけであった。当時、これらの地域は貿易取引から比較的孤立していたのがその原因とされる。

イギリスで最初に感染者が出た場所については、当時の人々の間にブリストルとする説とメルコムとする説があったことがわかる。ブリストルは、イングランド西部のグロスターシャの都市で、深い入り江の奥に位置している港町である。ここを最初の感染地とするのは、イングランド北部で書かれた匿名の年代記〔史料10〕とイングランド北西部の修道士ラルフ・ヒグデン Ralph Higden の年代記〔史料11〕である。一方、メルコムはイングランド南部のドーセットにある港町で、メルコム説を取るのはノーフォークのフランシスコ会修道士である〔史料12〕。それによれば、ブリストル経由で到着した船なかに聞いたことのない伝染病に感染した、ガスコーニュから来た船員がいてメルコムの人々にうつしたという。また、一三五〇年代にイングランド西部のマームズベリー修道院で編纂された年代記にも、「海の向こうの国々から、この先憎まれることになる悲惨な疫病」がメルコム港に到達し、「南部を駆け

回り、ドーセット、デヴォン、サマーセットの無数の人々を殺した。…次に、それはブリストルを襲い、そこでは生き残った者はほとんどいなかった」と書かれている〔史料13〕。カンタベリー大司教の裁判所書記ロバート・オヴ・エイブスベリーも「イングランドでは、聖ペテロの祝日（八月一日）頃、ドーセットで始まり、直ちに前触れもなくあらゆる場所に広がった」と書いている〔史料14〕。

これらの修道士たちは、もちろんブリストルやメルコムでの感染現場を目撃したわけではない。おそらく修道院のネットワークを通して伝わった伝聞証言をもとにしたものであろうが、当時の人々の認識では、西部のブリストルと南部のメルコムの二つの説があったことが読み取れる。どちらが黒死病の最初の感染地なのかを特定することはできないが、ブリストルも、メルコムも当時は百年戦争からの帰還兵の上陸地であり、また、ヨーロッパ本土と結ぶ貿易港であった。

黒死病のイングランドへの到達時期については、これらの年代記などに記された情報を日付順に整理すると、一三四八年の「洗礼者聖ヨハネの祝日（六月二三日）の前日」〔史料12〕、「聖ヨハネの祝日（六月二四日）頃」〔史料11〕、「殉教者聖トーマスの聖遺物移動の祝日（七月七日）頃」〔史料13〕、「聖ペテロの祝日（八月一日）頃」〔史料10、14〕となる。多少のばらつきが見られるものの、大きく分けると六月末から七月初めと、八月初めの二つに分けることができる。第三章第二節で紹介するように、現存する史料のなかで、イングランドにおいて疫病に対する最も早い聖職者の反応を記録しているのは、ヨーク大司教ウィリアム・ズーシェ William Zouche がヨーク司教区内の役人に宛てた書簡で、その日付は一三四八年七月二八日である〔史料29〕。イングランド北部にいるヨーク大司教が七月末に指示を出していたことを考えれば、黒死病のイングランド到達時期は八月初めというよりも、六月末から

七月初めとする方が妥当であろう。

第三章　教会の対応

第一節　黒死病の原因をめぐって

現在では、ペストの原因は解明されている。それは本来、森林原野のペスト菌の常在地域に生息するネズミ科やリス科などのげっ歯類動物が罹る病気であり、これらの動物間ではノミを介して常に流行を繰り返している。クセノプシラ・ケオピス Xenopsylla Cheopis と呼ばれるノミが、火災や地震、水害などの環境悪化に伴って、人に近づいてペスト菌をうつし、そして人がペストに罹るとされる(29)。

現代医学では、感染経路や臨床症状からペストは腺ペスト、敗血症ペスト、肺ペストに分けられる。まず、ペストの八〇％を占めるとされる腺ペストは、血液中のペスト菌が一日から一週間の潜伏期間後に、高熱や頭痛、嘔吐、ひきつけ、錯乱などを併発する。最終的に鼠蹊部リンパ腺、腋窩リンパ腺、頸部リンパ腺に腫脹をもたらす。さらに、皮下出血を伴うと、チアノーゼ反応による紫（黒）斑がみられる。敗血症ペストは、菌の侵入後に局部症状がないまま、全身に菌が伝播して増殖し、最後には敗血症、昏睡、手足の壊死などを起こして、早ければ一日のうちに、あるいは二、三日で死亡するとされている。肺ペストは、腺ペスト末期や敗血症ペストの経過中に、肺に菌が侵入して肺炎を続発する。その

ため、肺ペスト患者が排出した空気を吸い込んだ人が二次的に肺炎となり、これがさらに感染源となる。死亡率が一〇〇％である肺ペストは、人から人へ飛沫感染するために最も危険性が高く、その症状は急激な呼吸困難、血痰、喀血などに伴う重篤な肺炎を引き起こし、二、三日で死に至る(30)。

イングランドの黒死病は、これらのうちのどれに分類されるのであろうか。〔史料12〕や〔史料14〕に三日あるいは四日で死亡すると記述されているから、おそらく敗血症ペストか肺ペストだったのではないかと推測される。また、ヨーク大司教の書簡〔史料29〕には大量死と飛沫感染を思わせる空気伝染についても触れていることなどから、一部では腺ペストの症状も出ていたかもしれないが、ほとんどの場合は腺ペストの症状が進行して、敗血症ペストと肺ペストが当時のイギリスで大流行していたのではないかと考えられる(31)。

（一）神の裁き

聖職者は一様に黒死病を人々の傲慢さ、罪深さに対する神の裁きであると捉えている〔史料29、30、31、33〕。その当然の結果として、疫病を防ぐ唯一の効果的な方法は、神の方を向いて祈りを捧げることであった。ここで取り上げた聖職者たちも、やはり共通してひたすら祈ること、祈願行列に参加するようにとの指示を出していた。これについては、第二節で述べることにする。

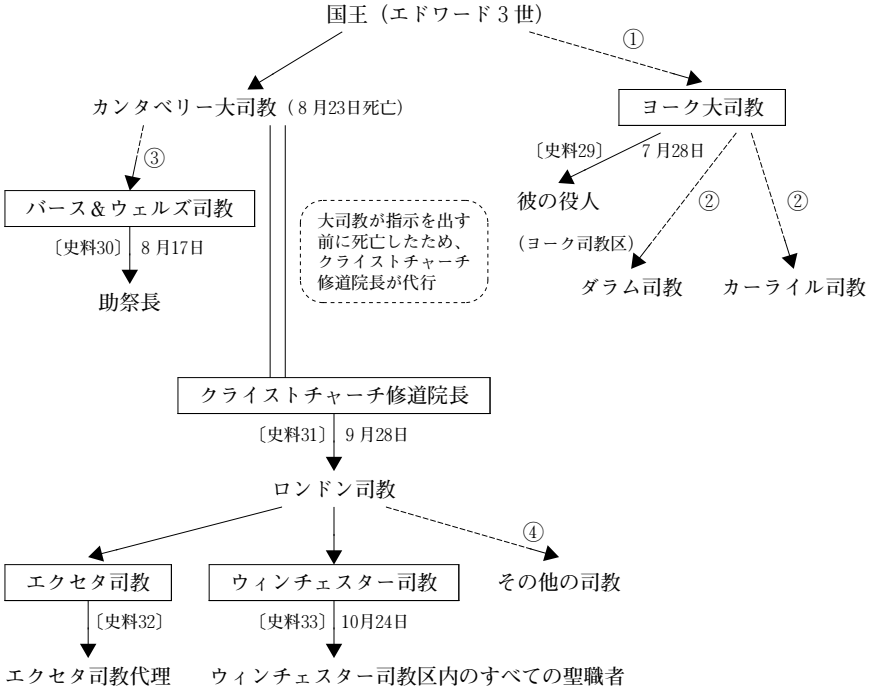
人々が堕落した具体例として聖職者が特に非難したのは、黒死病が流行する前年に行われたトーナメントと、当時流行していた服装であった。トーナメントとは、騎士たちが行う馬上武術試合のことで、訓練の場であるとともに無名の騎士や身分の低い騎士に世に出る機会を与える場でもあった。武器を用

いて生死をかけて危険な戦いを行うことから始まったが、時の経過とともにトーナメントは、人々に人気のある見せ物となっていた。それでも教会は人道的な立場から、国王は優秀な軍人や指揮官を失う場となる恐れから、トーナメントの開催に反対した。リチャード一世（在位一一八九～九九）は様々な方策を講じ、トーナメントを許可制にしたが効果はなく、町や城、街道、市場などの広場で試合が行われるようになった。

当時の年代記には、トーナメントを見学あるいは参加する貴婦人たちの派手な服装とみだらな行為が批判の槍玉に挙げられている〔史料18、43〕。トーナメントを批判する背景には、一三四七年十月にエドワード三世と黒太子がカレー攻囲戦から帰国し、その後、宮廷でのトーナメントに盛んに参加していたこと、また、そのために莫大な出費のあったことが挙げられる。たとえば、王家納戸係会計簿によれば、王の鎧師は金箔銀箔の絹のふさ飾り、馬具、旗幟、兜の天頂飾り、きらびやかな装飾品などの代金として一度の支払いで一〇六ポンド十八シリングを受領したという(32)。こうした浪費が神の怒りを招いたとされたのである。

一三四〇年代当時流行していた服装も人々の堕落の原因であった。特に、エノー伯の娘フィリッパがエドワード三世のもとに輿入れしたのに伴い、エノーから一緒についてきた従者らが奇異な服装を持ち込み、これをイングランドの人々が真似たことであった。昔の礼儀正しい裾の長いたっぷりとした衣服から、体にぴったりとした丈の短い衣服が流行した。『ウェストミンスター年代記』によると、聖職者たちまで同じような服装をしたという。年代記作者は「こういうことに現れた高慢の罪は、将来不幸をもたらすに違いない」と嘆いている〔史料44〕。

図１　1348年



第二節　教会の対応

図一は、現存する史料から、国王や大司教などがイングランドの教会に対して出した指示を時系列に沿って図示したものである。実線の矢印は実際に出された指示を、点線の矢印は推測される指示を示している。また、ヨーク大司教のように四角で囲まれているのは、彼らが書いた書簡が残っていることを表している。

まず、イングランドで最も早い反応は、先に述べたようにヨーク大司教が七月二八日にヨークにいる彼の役人に宛てた書簡である。ここで注目されるのは、国王エドワード三世がカンタベリー大司教に大司教区内で祈願行列を実施する計画を立てるよう指示を出していることである。国王の指示書自体は残っていない

が、カンタベリー大司教が死亡して次の大司教が選ばれるまでにかなりの時間がかかるため、カンタベリーのクライストチャーチ修道院長が代行することになったことが〔史料31〕から明らかである。このため、カンタベリー大司教だけでなくヨーク大司教にも国王の指示が出された可能性が高い（①）。そして、当時のヨーク大司教管区には、ヨーク司教区のほかにダラム司教区とカーライル司教区があったことから、ヨーク大司教の祈願行列をするようにとの指示は、ダラム司教やカーライル司教にも出されたと推測される（②）。

他方で、カンタベリー大司教に代わってクライストチャーチ修道院長は、ロンドン司教に対して、カンタベリー大司教管区にいるその他の司教たちにもこの命令を伝えるように頼んでいる〔史料31〕。エクセタ司教やウィンチェスター司教の動きは、クライストチャーチ修道院長、ロンドン司教を通して伝達された国王の命令を受けてのことと推測される。そうであれば、カンタベリー大司教区内の他の司教たちにも同様の指示内容を伝えたと推測される（④）。

一方、バース&ウェルズ司教はカンタベリー大司教管区に属するのであるが、クライストチャーチ修道院長がロンドン司教に指示した時期よりも一か月以上も前（八月十七日）に司教区内での祈願行列を命じている。バース&ウェルズ司教は、カンタベリー大司教から死亡前に直接指示されていたのか（③）、あるいは、この司教区は最初期に黒死病の影響を受けたブリストルがすぐ近くにあるため、司教が単独で指示を出したのかもしれない。

第二章では、黒死病のイングランド到達の時期については、六月末から七月初めとする方が妥当であると述べたが、ここでの検討から国王はかなり早い時期に対応を取るように、カンタベリーとヨークの

大司教に指示したと推測される。しかし、カンタベリー大司教管区の教会に対しての指示は、大司教の死亡という事態から遅れてしまったと思われる。

（一）祈願行列

祈願行列は、グレゴリウス一世が教皇位にあった時（在位五九〇～六〇四）に始まると言われる。五九〇年にローマが疫病に襲われたとき、グレゴリウスは行列を率いて、自身が作成した連祷を詠唱しながら街中を練り歩いた。行列が市中を進んだ時、大天使ミカエルがハドリアヌス廟の上に現れてその剣を鞘に収めたとされ、神の怒りがなだめられた表れと受けとめられた[33]。この故事にならって、西ヨーロッパのキリスト教世界では、疫病が流行すると、人々は教会に集まり、祈りを唱えながら市中を行進して悔い改めを表したとされる。したがって、ヨーク大司教らが指示した祈願行列は、イングランドやイギリスに限らず、西ヨーロッパでも広く行われていたものである。また、疫病だけでなく様々な機会にも行われたようである。たとえば、長谷川氏によれば、ブルゴーニュ戦争期（十五世紀）のストラスブルグでは、「平和を願うわれわれと、他のすべてのキリスト教徒たちに、突然の死や他のすべての不快なことに対して、彼らの魂と肉体が必要とする恵みを与えてくれるように」願う行列を挙行するよう命じた条例が存在していた[34]。

図一から明らかなように、黒死病期のイングランドでは大司教から大司教管区内の各司教へ、そして司教区内の教区教会という教会組織網を通して祈願行列とミサを挙行するように伝達されたわけである。この伝達が教区内でどの程度実行されたのかについては不明であるが、〔史料31〕と〔史料32〕に

よると、「どのような行動をとったのか、報告しなさい」と司教たちに実施の報告を命じていることから、かなりの強制力があったのではないかと考えられる。また、祈願行列やミサに参加した人には一定の贖宥が与えられることから、人々の側でも救済を求めて参加したと推測される。

一般の人たちは、男性も女性も組織された行列やミサに参加するだけでなく、様々な方法でその恐怖や改悛を表現した。アイルランドの修道士J・クリンは、疫病接近の不安が人々を巡礼へと駆り立てる様子を書き留めている〔史料23〕。カンタベリー大聖堂の出納簿は、一三五〇年に教会への献金が急増したことを示している。ローマ教皇庁も、一三五〇年を「大赦の年」Jubilee Yearとし、その年にローマへ巡礼した者には完全な贖宥が与えられ、その罪を完全に赦されるとした。また、一三六一年に第二の疫病がウエスト・ミッドランドを脅かした時、メルベールへ向かう巡礼者の数の多さが人々の不安の原因となっていたという(35)。

聖人への祈願も疫病対策の一つであった。なかでも崇敬されたのが聖母マリアである。そのマントで人類を保護している慈悲の母としてのイメージから、マリアは疫病が流行すると、きまって頼られる存在であった。次に紹介する鞭打ち苦行者が使った聖歌の一つが「悲しみの聖母」*Stabat Mater*で、息子の磔を見守ったマリアの苦難を呼び覚ます十三世紀の詩である。疫病には、また特別な守護聖人がいた。最も知られているのは、聖セバスティアヌスで、彼はヨーロッパの至るところで頼られた聖人であった。フランドルとイタリアにある彼の聖遺物は、疫病が発生するとかならず巡礼者を引きつけた。スコットランドの年代記作者は、疫病から逃れる一番の望みは聖人セバスティアヌスへの信仰にあると考えていた(36)。

（二）鞭打ち苦行

改悛の行為は、西ヨーロッパで鞭打ち苦行という極端な贖罪運動を生み出した。蔵持氏によれば、鞭打ち苦行者が初めて出現したのは一二六〇年頃のイタリア中部のペルージアで、その後ローマ、さらにイタリア全土に次々と登場するようになった。当時、イタリアでは、前世紀の叙任権闘争に端を発した教皇派のグェルフ党とドイツ皇帝派のベギリン党との反目が続いていた。そこで、公衆の面前で賛美歌を歌いながら自分の体に鞭を打ち、神に両者の和解を懇願する苦行団が組織された。通説では、彼らは、十二世紀イタリアのシトー会修道士で神秘主義者でもあったジョアッキーノ・ダ・フィオーレの思想に影響されていたという(37)。

イタリアに始まった鞭打ち苦行は、アルプスを越え、ヨーロッパ中部、特にドイツやラインラント、アルザスへ広がった。しかし、苦行の行進をすれば、一切の罪が浄められるという論理は教会の権威を否定する恐れがあった。このため、既存の教会の受け入れるところとはならず、苦行者は破門の対象になったが、疫病や飢饉が起きると復活を繰り返した。そして黒死病の大流行によって完全復活し、一三四八年八月、イタリア北東部のヴェネツィア地方から北上してオーストリアやハンガリー、ポーランド、ドイツの各地で信徒を増やし、翌年クリスマスには八〇万人までに膨れあがったとされる(38)。

蔵持氏は、一三四九年七月八日のストラスブルグでの鞭打ち苦行者の様子を次のように紹介している(39)。

「賛美歌を歌いながら、二列に並んでいる。総勢約二〇〇人。先頭に十字架を押し立て、深紅のビロードでこしらえた金色の縁取りがある見事な幟を持った者たちが続く。その後には、蠟燭を持った者たちが続いた。そこには貴族、聖職者、富裕商人のみならず、女子供、浮浪者らしい者たちがいた。全員が赤い十字を縫い付けた尖頭帽にマントを羽織り、何本もの針が付いた革紐の鞭を持っていた。一行は、シチリア出身の在俗信徒で、各地の名刹に巡礼するべく、イタリア本土からハンガリー、ドイツ、はるばるアルザスまで来た。（中略）教会や大聖堂に着くと、両腕を十字に組んで神に祈る。広場に集まって輪を作り、履物を脱ぎ、上半身裸になって、埃や泥濘の地面に横たわり、それぞれが自分の犯した罪を示す姿勢をとった（例えば、姦通の罪を働いた者はうつ伏せ、偽誓を行った者は横向きに寝て、指を三本上に突き上げる）。

この儀礼的所作が済むと、指導者は全員を鞭打ち、「純粋な苦悩の力によって起きよ。汝の罪を増やさぬよう心せよ！」と言った。起き上った苦行者たちは、次のように唱えて自らを鞭打った。

「大いなる不安と、神（イエス・キリスト）とその慈悲の死を想い起こしつつ、われらが腐肉を強く打たん……」。

疫病から自分を救ってくれる存在かもしれないと考え、各地で人々は苦行者の流す贖罪の血こそがイエスの流した救いの血につながると期待した。しかし、次第にあまりに増えすぎた苦行者に嫌気と反感を覚え、教会も苦行団の指導者たちが奇蹟を行うと公言したり、告解を引き受け、あるいは聖職者に代わって赦免を授けたりすることを行ったため次第に態度を硬化させていった。ストラスブルグ司教は苦

行者たちが司教区内で行列することを禁じ、十月には、彼らはストラスブルグを去り、新たな巡礼地へ向かったという[40]。

ローマ教皇クレメンス六世（在位一三四二～五二）は自らアヴィニョンでの鞭打ち苦行団の行列に参加したと報告されている[41]。しかし、苦行団の運動が教会の権威をますます批判するに及んで、特にその支持者たちが悪意に満ちた反ユダヤ主義の行動を引き起こすにつれて、一三四九年十月二〇日、クレメンス六世は、アヴィニョンから鞭打ち苦行者たちを破門にするとの勅書を出し、彼らが行列しながらユダヤ人への憎しみの種を播き、キリストの慈悲が守るべきユダヤ人の血を、自らの手で流していると批判した。その上で、各地の大司教や司教に、鞭打ち苦行者たちの集会や慣行、規約などすべてを禁じ、聖職者や在俗信徒たちが彼らに近づかないように監視することを命じた[42]。

イングランドでも、一三四九年に一二〇人以上の人々がフランドルからロンドンに到着し、ストラスブルグでの鞭打ち苦行と同じような儀式を行ったことが報告されている〔史料53〕。また翌年にも「外国生まれの身分の高い人たち」が到着して、「自分の体に血が流れるまで歌ったりしながら激しく鞭を打った」が、「彼らは間違った教えによってこうしたことをしたと言われている」と記されている〔史料53（b）〕。イングランドに到着した時には、すでに鞭打ち苦行団に対する評価が決定的に変わったので、軽い好奇心を引き起こしただけのように思われる。

第四章　ユダヤ人迫害をめぐって

第一節　毒物の投棄

黒死病の流行期に、人々の間でこの疫病の原因をユダヤ人による毒物投棄とする噂が広まったことは、よく知られているだろう〔史料6、68〕。キリスト教会は、このような噂によるユダヤ人迫害を放置したわけではない。一三四八年七月五日に教皇クレメンス六世が勅書を発布して、ユダヤ人に対して教会の保護を拡大し、ユダヤ人を保護するように命じた。同年九月二六日には、すべての高位聖職者と下位聖職者に対してユダヤ人迫害について対策を講じるように命令を出し、十月一日に、この命令が再発布されている(43)。しかし、教皇が命令を再三、出していることは、迫害がおさまらないことを示唆している。

ケルン市当局の役人らは一三四九年一月一二日付でストラスブルグの市長や役人に宛て、書簡を送り、「昨今の大量死は神罰が下ったためであり、それ以外の原因ではない」と疫病の原因を冷静に分析し、治安維持の立場からユダヤ人の問題に慎重に対応するように周辺の都市に求めている〔史料72〕。

ユダヤ人が毒を投げ入れたという噂が広まり、各地でユダヤ人に対する迫害が起きたのは明らかであるが、ユダヤ人への迫害は、黒死病の流行期に初めて起きたのだろうか。村上氏は、「ペストの流行で一種のパニック状態になった人びとの間には、日頃憎しみを抱いている相手をスケープ・ゴートに仕立

て上げる風潮が生まれたのである」として、ユダヤ人迫害が黒死病の二次災害であったかのような印象を与える説明をしている(44)。一方、蔵持氏は、黒死病の流行以前にユダヤ人が虐待されていたことを認めているものの、黒死病がもたらした未曾有の大量死がパニックを引き起こし、「異教徒を虐待することがキリスト教徒としての贖罪につながり、ひいては黒死病から逃れられるとする期待」がユダヤ人迫害に向かわせたと、両者の因果関係を強調する(45)。

これに対して佐々木氏は、ドイツにおける黒死病とユダヤ人迫害との関係については研究が極端に少なく概説の域を出ないこと、また、ユダヤ人迫害は黒死病の随伴現象としてごく簡単に説明される傾向にあることを指摘する。その上で、ストラスブルグは複数の同時代証言に恵まれ、事件の前後関係をかなり正確に同定することが見込める都市として、黒死病とユダヤ人迫害の前後関係を検証する。その結果、マティアス・フォン・ノイエンブルグの『帝国年代記』の記述から、ストラスブルグで黒死病の流行が始まるのは一三四九年六月の中旬であったが、ユダヤ人への迫害はその年の二月十四日頃にすでに起きていたことを明らかにした(46)。フリッチェ・クローゼナーの『ストラスブルグ年代記』の記述によれば、一三四九年にこの町で起こった事件は、ユダヤ人迫害、鞭打ち苦行者、ペスト、都市内闘争という順序であった(47)。このように同時代人の証言によれば、ユダヤ人迫害は黒死病の流行以前にすでに起きていたことなる。なお、ストラスブルグは、ケルン市当局の役人らが一三四九年一月十二日付でユダヤ人迫害を取り締まるように求める書簡を送った町である〔史料72〕。この書簡を受け取った時期には、まだ黒死病には襲われていなかったことになる。

ユダヤ人迫害と黒死病の前後関係は、一四〇〇年頃を境に逆転したというのが佐々木氏の説である。

たとえば、ドミニコ会修道士ハインリヒ・フォン・ヘルフォルトの『世界年代記』ではユダヤ人迫害が先であり、また、ユダヤ人による毒物投棄の噂はあくまで流言であると一蹴している[48]。ところが、その後を書いたコンラート・フォン・ハルバーシュタットは、ヘルフォルトの年代記を援用しているものの、黒死病、ユダヤ人迫害の順序で書き直し、さらにユダヤ人による毒物投棄の噂を実際にあったこととして前面に押し出して書いている。佐々木氏は、この年代記作者の意図を、ユダヤ人に負債を負っている大司教や領主などが迫害に加担している事実を隠蔽するために、責任を毒物投棄としてユダヤ人に転嫁したとみなす。こうして、「事件の後遺症が強く感じられる目撃者の説明が、後続世代によって操作され、加害者にとって当たり障りのない説明に変更された。それがユダヤ人迫害を説明する新たな言説として後世まで残された」と結んでいる[49]。

第二節　イングランドのユダヤ人

イングランドにおける黒死病とユダヤ人迫害との関係について、同時代の史料には言及されておらず、特に問題となった形跡がない。その理由は、イングランドでは黒死病の流行以前にすでにユダヤ人迫害が頻発し、王権による対応策が取られていたためである。

（一）王権とユダヤ人保護

イングランドにいつからユダヤ人が住みついたのかについて定説はないが、浜林氏はローマ時代に奴

隷として連れてこられたのが最初ではないかという。一〇六六年のノルマン・コンクェスト後、ウィリアム征服王（在位一〇六六～八七）は、ノルマンディー地方のルーアン在住のユダヤ人にイングランド移住を勧めた。この招きを受け入れ、イングランドにユダヤ人居住区がつくられるようになる。ロンドンで「ユダヤ人街」がはっきりと認められるようになるのは一一二八年のことである(50)。

ノルマンディー地方から移住したユダヤ人は、フランス語を話したため、現地人（アングロ・サクソン人）との同化は難しく、ユダヤ教信仰の遵守や共同体の繁栄のためにも国王の保護を求めた。王権の側でも、保護の代償にユダヤ人からさまざまな上納金を吸い上げようとした。特に、キリスト教徒は金融業を営むことが出来なかったため、国王は、異教徒であるユダヤ人に営ませ、その利潤を様々な名目で吸い上げようとした。ここに両者の利害が一致したのである。イングランドでユダヤ人に対する保護を明記した最初の文書は、ヘンリ一世（在位一一〇〇～三五）によるチャーターで、国内移動の自由、通行税の免除、暴行からの保護、国王裁判所に訴える自由、土地所有権の保証などを、継続的に一定額の上納金を納付することを条件に合意させた。これ以後、歴代国王はユダヤ人からの税収入に頼るようになり、フランスとの戦争や十字軍編成の費用に充てるため、必要な時にはいつでも税を徴収することをユダヤ人に承諾させていた(51)。

（二）反ユダヤ感情と迫害

こうした王権側の要望に応えて、ユダヤ人は貴族や聖職者に高利貸しを行なった。しかし、国王によるユダヤ人に対する保護とユダヤ人の築き上げた豊かな財産や高利貸しは、ユダヤ人に対する人々の嫉

妬をより強くさせ、反ユダヤ感情を生み出す結果となった。早くも一一四四年に、儀式殺人という噂をもとに、ノリッジで事件が起きている。ひきつけが原因で亡くなった少年ウィリアムの死因を、ユダヤ人による殺害だとする噂が町中に広まり、この噂を過度に信じた人々がユダヤ人を襲撃したのである。中村氏は、これを「西洋で最初の儀式殺人事件として記録され、大きな意味を持つようになった」と強調する(52)。それに加え、このような噂のために、原因不明の少年の死体が発見されるとその少年が殉教者として崇められた。一一四四年のノリッジの事件の場合、少年は「聖ウィリアム」として聖堂に祀られ、ノリッジ市とその修道院は多く人々の巡礼先となり、また多大な献金などによって利益をあげたという(53)。

一一八九年九月三日にリチャード一世の戴冠式がウエストミンスター大聖堂で行われ、その際に、ユダヤ人の参列をめぐってトラブルが起こった。ユダヤ人は公式な式典に出席することは認められていなかったが、リチャード一世自身がユダヤ人実力者に招待状を出していたからである。この結果、宮殿内に入ろうとするユダヤ人とそれを阻止しようとする人々だけでなくその付近にいた人々も巻き込み暴動事件に発展した(54)。この暴動はさらに地方へと波及し、ヨークでは一一九〇年三月十六日からユダヤ人居住区が襲撃され、焼き討ちや虐殺によって数日間のうちに犠牲者が二〇〇人以上にのぼったと言われる。「最も悲惨なユダヤ人虐殺」あるいは、「最初の大規模な反ユダヤ人暴動」と呼ばれる事件である(55)。

ヘンリ三世の治世（一二一六～七二）になると、ユダヤ人は王権によってますます多額の上納金を徴収されただけでなく、教会会議によって教会への十分の一税の納入が義務づけられた。こうしたなか

で、一二三四年には、「ノリッジ割礼裁判」として知られている事件が起きている。ユダヤ人がキリスト教に改宗した息子に割礼を行なったことで告訴され、国王がユダヤ人保護の政策を捨てて、被告を絞首刑に処した事件である[56]。また、一二五五年八月末にはリンカーンで、「中世英国の儀式殺人告発中、最大の犠牲を出した事件」が起きている。ある裕福なユダヤ人の結婚式の翌日、三週間も前から行方不明になっていたキリスト教徒の少年ヒューがユダヤ人街の汚水槽で遺体となって発見された。少年は遊んでいる最中にボールを追いかけて誤って落ちたようであるが、少年の遺体が聖堂に運ばれると、ユダヤ人が少年を殺害したという噂が立って、主犯者としてユダヤ人コピンが捕らえられ、「仲間たちの集会で儀式のために、この少年を死に至らしめた」と拷問されて自白してしまった。その知らせを聞いた国王はリンカーンへ向かい、即刻容疑者を絞首刑に処したという。さらに、この事件に関わった一〇〇名近いユダヤ人が裁判にかけられ、うち十八名が絞首刑となった。これは、国王自身による容疑者の審問と極刑宣告であり、従来の対ユダヤ人政策とは異なる厳しさであった[57]。

こうしたなかで、エドワード一世（在位一二七二～一三〇七）は、ユダヤ人が歴代国王による度重なる搾取と宗教会議によるユダヤ人の取り締まりの強化によって精神的にも経済的にも困窮していることを認識していたが、彼らから税金を絞り取り続けた。たとえば、一二七五年に「ユダヤ人制定法」を発令し、ユダヤ人が不動産を抵当として金融業を行うことを禁じた。この法律の背景には、これまでも何度も問題視されてきた高利貸し業の禁止だけでなく、農業や工業に従事させ、そこから税を絞り取るのを狙いとしていた[58]。しかし、国内では依然として反ユダヤ暴動が頻発し、さらに、新たな社会問題も表面化した。ユダヤ人による硬貨偽造である。この時代にユダヤ人は国王から硬貨の鋳造を任されて

いたが、硬貨を削ったり、硬貨を溶かして贋金を作り、イングランド経済を脅かした。一二七八年十一月十七日に硬貨偽造の疑いでユダヤ人が家宅捜査を受けた。贋金作りに関わったことを示す証拠が見つかった者は六八〇人にのぼり、彼らは裁判にかけられ、ロンドン塔に幽閉された(59)。

一二九〇年七月十八日、国王評議会においてユダヤ人の追放が発令された(60)。その背景となったのは、反ユダヤ暴動の慢性化、ユダヤ人による硬貨偽造事件の続発、そしてキリスト教への改宗強制という同化政策の失敗であるが、これに加え、ユダヤ人制定法の一つである「ユダヤ人は都市に家・宅地を持つことができる。また、農地は十年以内の間、もし商工業に従事しないのであるなら十五年間のみ持つことができる」という規定も追放への理由となった(61)。この農場借地の期間の十五年が一二九〇年で満期終了となったからである。「最早エドワード一世はその決断を躊躇する必要はなかった」(62)。これ以後一六五六年にクロムウェルによって再入国の許可が出されるまで、公式にはユダヤ人は国内不在とされた(63)。黒死病期のイングランドでユダヤ人迫害が記録されていないのは、このような事情からである。

おわりに

十四世紀半ばからヨーロッパを中心に猖獗を極めた黒死病が何度にもわたって甚大な被害をもたらしたことは言うまでもない。しかし、黒死病は当時の人々すべての命を奪った訳ではなかった。この疫病を生き抜いた人々がいたのである。彼らが封建制から資本主義への転換期において重要な役割を担っ

た。彼らが次第に富を蓄積して、借地農業経営者、小規模保有農民、そしてそれよりも豊かな独立自営農民（ヨーマン）や豊かな職人となり、村や教区の行政にリーダーシップを発揮するようになったのである[64]。こうした生き残った人々による復興・再建の過程については、今後の課題としたい。

（しらいわ　ちえ・平成二十年度文学研究科英米文化専攻修士課程修了）

［註］

（1）蔵持不三也『ペストの文化誌―ヨーロッパの民衆文化と疫病』朝日新聞社、一九九五年、三六頁。

（2）滝上正『ペスト残影』神奈川新聞社、二〇〇二年、三九頁。

（3）青山吉信・今井宏・越智武臣・松浦高嶺編『イギリス史研究入門』山川出版社、一九七三年、五九～七三頁。

（4）たとえば、石坂昭雄・船山榮一・宮野啓二・諸田實『新版西洋経済史』有斐閣、一九八五年。

（5）J. A. Raftis, 'Social Structures in Five East Midland Villages', *Economic History Review*, 2nd. ser, Vol. 18 (1965), pp. 83–100.

（6）Z. Razi, *Life, Marriage and Death in a Medieval Parish : Economy, Society and Demography in Halesowen 1270–1400* Cambridge, 1980.

（7）見市雅俊『ロンドン＝炎が生んだ世界都市―大火・ペスト・反カソリック』講談社、一九九九年。

（8）石坂尚武訳「ドメニコ・カヴァルカ説教例話選集（一）～（二）―十四世紀黒死病前のドミニコ会士説教例話集」『人文学』（同志社大学人文学会、二〇〇二～五年）、（一）七〇～九六頁、（二）一一三～二二頁。同「イタリアの黒死病関係史料集（一）～（六）」『人文学』（同志社大学人文学会、二〇〇三～八年）、（一）二二～七三頁、（二）二六～八三頁、（三）一三九～二三六頁、（四）一三五～七六頁、（五）九七～一四七頁、（六）八七～一四四頁。

（9）佐々木博光「黒死病とユダヤ人迫害―事件の前後関係をめぐって」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』第

五二巻（二〇〇四年）、一～十五頁。同「十四世紀中葉のユダヤ人迫害―迫害の歴史がなぜくり返されたのかを考えるために」『西洋史学』第二一三号（二〇〇四年）、五五～六八頁。同「変容するペスト・ポグロム―ドミニコ会修道士の世界年代記の場合」『西洋史学』第二二四号（二〇〇六年）、十八～三八頁。

(10) Rosemary Horrox, *The Black Death*, Manchester, 1994.

(11) 'Black Death', http://dictionary.oed.com

(12) John Aberth, *The Black Death : The Great Mortality of 1348–1350, A Brief History with Documents*, New York, 2005, pp. 31-32, No. 6 'Introducton to The Decameron 1349–1351'; ジョヴァンニ・ボッカチオ、河島英昭訳『デカメロン（上）』講談社、一九九九年、十九頁。

(13) 見市雅俊「黒死病はペストだったのか―ヨーロッパ・ペスト史研究序説」『中央大学文学部紀要』第三四号（一九八九年）、四一頁。

(14) たとえば、アングロ・サクソン人の修道士ベーダ Bede は、『イングランド人の教会史』（七三一年）のなかで、'mortalitas' を用いている。また、ノルマン系イングランド人のウィリアム・オヴ・マームズベリーは、『イングランド列王伝』のなかで、同じように 'mortalitas' を使っている。Bertram Colgrave and R. A. B. Mynors (eds.), *Bede's Ecclesiastical History of the English People*, Oxford, 1969, p. 233; R. A. B. Mynors (ed.), *The History of the English Kings : William of Malmesbury*, Oxford, 1998, pp. 571–72.

(15) 石坂尚武編訳「イタリアの黒死病関係史料集（一）」、二六～七頁。

(16) 「正確な数を出すことは不可能である。教会も世俗国家も死者数の記録をとっていなかったからである」とエドマンド・キングも述べている。エドマンド・キング、吉武憲司監訳『中世のイギリス』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年、二六五頁。

(17) 船山榮一「社会的分業の展開と小ブルジョワ経済の形成―ヨークシャー「人頭税報告書」の分析」『社会労働研究』（法政大学、一九五八年）、七一～一一四頁。

(18) エセックス州のいくつかの教区を対象に黒死病後の住民の移住、定住、結婚、雇用のパターンを検出しようとしたプーズの研究がその代表である。L. Raymond Poos, *A Rural society after the Black Death : Essex 1350–1525*,

Cambridge, 1991.

(19) John Hatcher, *Plague, Population and the English Economy 1348–1530*, London, 1977, p. 71；ヨーロッパ中世史研究会編『西洋中世史料集』東京大学出版会、二〇〇〇年、三五五頁。

(20) カルロ・M・チポラ、日野秀逸訳『ペストと都市国家―ルネサンスの公衆衛生と医師』平凡社、一九八八年、二四頁。その他に、「三分の一」を挙げている研究には以下のものがある。「以前の学者たちの定説では、一三四八年から一三五〇年までのその期間の初め頃から最も破壊力があった発生時に、ヨーロッパの居住者のおよそ三分の一の命を奪ったということであった。」J. Aberth, *op. cit.*, p. 3；「黒死病は一回の流行でイギリス人口の約三分の一を一掃してしまったらしい。」マルカム・フォーカス・ジョン・ギリンガム編、中村英勝・森岡敬一郎・石井摩耶子訳『イギリス歴史地図　改訂版』東京書籍、一九九〇年、一六七頁；「人口の少なくとも三分の一をいっきに失ったとされる。」見市雅俊『ロンドン＝炎が生んだ世界都市』、一〇二頁。

(21) 見市雅俊「黒死病はペストだったのか」、四四頁。

(22) 「ヨハネの黙示録」第八～九章、『聖書（新共同訳）』日本聖書協会、一九九一年、四六一～三頁。

(23) 第一回目の流行から第十七回目まで、年代順に一三四八～九年、一三六二～三年、一三六九年、一三七五年、一三七九～八三年、一三八九～九三年、一四〇〇年、一四〇五～七年、一四一三年、一四二七年、一四三三～四年、一四三八～三九年、一四五七～八年、一四六三～四年、一四六七年、一四七一年、一四七九～八〇年。青山吉信編『世界歴史大系イギリス史一―先史～中世』山川出版社、一九九一年、年表六三～七一頁を参照。

(24) 野上毅『朝日百科世界の歴史、第六巻十四～十五世紀』朝日新聞社、一九九一年、三五六頁。

(25) John Aberth, *The Black Death: The Great Mortality of 1348–1350*, p. 3.

(26) エドマンド・キング『中世のイギリス』、二六五頁

(27) John Aberth, *op. cit.*, p. 2.

(28) *Ibid.*, p. 1

(29) 滝上正『ペスト残影』、二八～二九頁。

(30) 蔵持不三也『ペストの文化誌』、二八～二九頁。

(31) エドマンド・キング『中世のイギリス』、二六五頁。
(32) グラント・オーデン・堀越孝一監訳『新版・西洋騎士道事典―人物・伝説・戦闘・武具・紋章―』原書房、二〇〇二年、二五八頁。
(33) R. Horrox, *The Black Death*, p. 95.
(34) 長谷川恵「十五世紀ストラスブルグの祈願行列―ブルゴーニュ戦争期を中心に」『比較都市史研究』第二六号（二〇〇七年）、一二五頁。
(35) R. Horrox, *op. cit.*, p. 95.
(36) *Ibid.*, p. 97.
(37) 蔵持不三也、『ペストの文化誌』、八二頁。
(38) 同上、八三頁。
(39) 同上、八〇、八二～三頁。
(40) 同上、八一～二頁。
(41) R. Horrox, *op. cit.*, p. 44.
(42) *Ibid.*, p. 96.
(43) *Ibid.*, pp. 221-2.
(44) 村上陽一郎『ペスト大流行―ヨーロッパ中世の崩壊』岩波書店、一九八三年、一一五頁。
(45) 蔵持不三也『ペストの文化誌』、九八～九頁。
(46) 佐々木博光「黒死病とユダヤ人迫害」、一頁。
(47) 同上、四～六頁。都市内闘争とは、ストラスブルグのミュルンハイム家とツォルン家の古くからの抗争や政変のことである。
(48) 佐々木博光「変容するペスト・ポグロム」、二四～六頁。
(49) 同上、三四頁。
(50) 浜林正夫『イギリス宗教史』大月書店、一九八三年、五四頁、五七頁。

(51) 中村真一郎「エリザベス朝演劇におけるユダヤ人像の原型（一）―中世イングランドのユダヤ人政策と反ユダヤ人主義の発生」『英米文学』第五〇号（関西学院大学英米文学会、二〇〇六年）、二五～三三頁。

(52) 同上、二九頁。儀式殺人とは、ユダヤ人がキリスト教徒の少年を誘拐して虐待し、十字架にはりつけるという噂の一つである。

(53) 佐藤唯行「中世英国のユダヤ人金融」『西洋史学』第一一一号（一九七九年）、五七頁。

(54) 中村真一郎「エリザベス朝演劇におけるユダヤ人像の原型（一）」、三二頁。

(55) 浜林正夫『イギリス宗教史』、五六頁。

(56) 同上、五六頁。

(57) 佐藤唯行「中世英国のユダヤ人金融」、五五頁。

(58) 中村真一郎、「エリザベス朝演劇におけるユダヤ人像の原型（一）」、三三頁。

(59) 同上、三四頁。

(60) 佐藤唯行「中世英国のユダヤ人金融」、五九頁。

(61) 田中智晃「エドワード一世期の利子禁止立法―利子を巡るイングランド国王とユダヤ人制定法に関する考察」『研究年報経済学』通巻第二三四号（東北大学経済学会、二〇〇四年）、一六〇頁。

(62) 佐藤唯行「中世英国のユダヤ人金融」、五九頁。

(63) 実際には、宮廷ユダヤ人として宮廷の出入りを許された医師や音楽家がいた。たとえば、ヘンリ八世（在位一五〇九～四七）が雇った音楽家バッサーノ、エリザベス一世（在位一五五八～一六〇三）の侍医ロドリゴ・ロペスがあげられる。ロペスは女王毒殺を企てた嫌疑で一五九四年に処刑されている。中村真一郎「エリザベス朝演劇におけるユダヤ人像の原型（一）」、二二頁を参照。

(64) アンソニー・J・ポラード・安元稔訳「中世後期英国史の最近の動向」『経済学論集』第三六巻第二号（駒沢大学経済学会、二〇〇四年）、六一～三頁。

史料翻訳

Rosemary Horrox, *The Black Death*, Manchester, 1994 より。史料番号は原著による。

〔史料6〕トゥルネーから見たペスト

(b) Gilles li Muisis from J.-J. de Smet. ed. *Recueil des Chroniques de Frandle* II, Brussels, 1841, pp. 305–7, 340–42, 378–82.

（トゥルネー〔現ベルギー、エノー州〕のベネディクト会セント・ジャイル修道院長 Gilles li Muisis の報告。）

「一三四九年、たくさんの事件の知らせが届き、ユダヤ人が井戸や川、泉に毒薬を流し込んで、キリスト教徒を破壊しようとしているという噂が至るところに広まった。東方で始まったこの疫病は、インドを通ってキリスト教と異教の国々すべてを襲い、死亡率は非常に高く、住民の三分の一が死亡した。ユダヤ人が捕らえられ、鎖に繋がれて、彼らが住んでいるすべての場所で投獄された。ユダヤ人が毒によってキリスト教徒を破壊する計画を立て、井戸や川、泉に毒薬を流したと疑われたためであった。そして、ユダヤ人はいろいろなところでこれを行ったと報告されている。というのは、ユダヤ人の中には、狡猾な天文学者がいて、彼らは星の運行からその死亡を予見して、確信を持って邪悪な目的を実行するように勧めたのである。彼らはまた、星の運行から、キリスト教徒が破壊されることになるのを知っていたのである。

フランス王国では、聖ルイの日以来、ユダヤ人は住んではいなかったが、ユダヤ人がいる多くの王国では、彼らがすべて捕らえられ、訴えられた。多くのユダヤ人は、その訴えを否定したけれども、ユダヤ人の中にはキリスト教徒を殺すつもりだったと白状した者もいる。遠くの国で起きたことについては

自分は何が起きていたのかわからないが、ドイツなどでは、ユダヤ人が焼き討ちされ、あるいは首を切られている。ロートリンゲンでは、見つかったユダヤ人はすべて焼き討ちにされた。」

〔史料7〕ジャン・デ・ヴェネットによるフランスにおけるペスト

Geraud, H. ed. *Chronique Latin de Guillaume de Nangis avec les continuations de cette chronique*, 2 vols, Paris, 1843, II, pp. 210–16.

（カルメル会修道士ジャン・デ・ヴェネット〔一三六九年死亡〕による年代記からの記述。）

「疫病の原因を空気または水が腐ったせいだとしている。この解釈の結果が、ユダヤ人のせいにすることになった。つまり、ユダヤ人が井戸や川に毒薬を投げ込み、空気や水を腐らせたというのである。このため、世界中がユダヤ人に立ち向かい、ユダヤ人居住区があるドイツなどでは、無差別に惨殺され、焼き殺された。ユダヤ人の夫が焼かれると、ユダヤ人の母親たちは、炎の中に子供たちを投げ込み、最後に自らが飛び込んだ。しかし、実際には、たとえそうした毒の投げ込みがあったとしても、疫病の流行の責任をそうした毒薬のせいだけにすることはできない。例えば、神の意思とか、あるいは空気や地球の悪化など、他の原因があるに違いない。」

〔史料10〕ブリストルでのペスト到達

Galbraith, V H (ed.), *The Anonimalle Chronicle*, Manchester, 1970, p. 30.

（おそらくイングランド北部で書かれた作者不詳の年代記。一三八一年までの時代を書いている。）

「一三四八年、聖ペテロの祝日〔八月一日〕頃、イングランドのブリストルに疫病が到達した。それは、商人や船員によって運ばれ、八月から冬の間中ブリストル南部の地方で続いた。一三四九年には、イングランドの他の地域にも現れ、一年中続いた。生きている人の数が少なくて死んだ人を埋葬できないという結果をもたらした。」

〔史料11〕ブリストル近くでのペスト到達

Babington, C. and Lumby, J. R. (eds.), *Polychronicon Radulphi Higden Monachi Cestrensis*, Rolls Series, 1865–86, VIII pp. 344–6, 355.

（イングランド西部グロスターシャーの港町チェスターにあるセント・ウェバラーのベネディクト会修道院の修道士ラルフ・ヒグデン Ralph Higden〔一三六〇年代初めに死亡〕による『ポリクロニコン』。世界の創造から一三四〇年までの世界の歴史を扱っている。）

〔一三四八年〕夏至からクリスマスの間、ものすごい豪雨が襲い、雨が降らない日は一日たりともなかった。この時期に、人間の大量死が世界中に広がり、アヴィニョンの教皇庁やイングランドとアイルランドの海岸の町で特に猛威をふるった。この年の聖ヨハネの祝日〔六月二四日〕頃、上に述べた疫病がブリストル地方を襲い、そこからイングランドの全ての地方に次々に移っていき、一年中続いた。実際、その猛威はすさまじく、人類の十分の一も生き残らなかった。」

〔史料12〕ドーセットへのペスト到達

Gransden, Antonia. ed. 'A Fourteenth-Century Chronicle from the Grey Friars at Lynn', *English Historical Review* LXXII,1957, p. 274.

（イングランド東部のノーフォークにあるリン〔現在のキングス・リン〕のフランシスコ会修道士による年代記。）

「一三四八年、二隻の船が、一隻はブリストルからやって来たのだが、夏至の少し前にドーセットのメルコムに到着した。ガスコーニュから来た船員の中には、疫病と呼ばれる聞いたことのない伝染病に感染した人がいた。彼らはメルコムの人々にその疫病をうつし、メルコムの人たちがイングランドで感染した最初の人となった。この疫病が原因で亡くなった最初は洗礼者聖ヨハネの祝日（六月二三日）の前日で、病気になってたった三日後のことであった。」

〔史料13〕ペストが広がる

Haydon, F.S. ed. *Eulogium Historiarum sive Temporis*, Rolls Series, 1858–63, III pp. 213–14.

（『ポリクロニコン』をモデルに、天地創造から世界の歴史を書いた『ユーロギウム』。一三五〇年代に、イングランド西部ウィルトシャーのマームズベリー修道院にて編纂された。）

「一三四八年、殉教者聖トーマスの聖遺物移動の祝日（七月七日）頃、この先憎まれることになる悲惨な疫病が海を越えて国々からイングランド南部のドーセットにあるメルコムと呼ばれる港に到達し、南部の田舎中を駆け回り、ドーセット、デヴォン、サマーセットの無数の人々を殺した。その上、この疫病は、キリスト教徒であっても、異端者に対するのと同じくらい冷酷であると信じられた。次に、それはブリストルにやって来て、そこでは生き残った者はほとんどいなかった。それから、北へと向か

い、市や町、村、あるいは家の中で逃れることのできたところはなく、そこに住むすべての人々を殺しながら、去っていった。それで、イギリス中では、全体として男性・女性・子どもの五分の一が埋葬された。その結果、病気の人の看病や死んだ人を埋葬するのに必要な人がほとんどいないということになった。生き残った女性の多くは、何年もの間、不妊の状態が続いた。」

〔史料14〕ペストがロンドンへ広がる

Thompson, E. M. ed. *Robertus de Avesbury de Gestis Mirabilibus Regis Eduardi Tertii*, Rolls Series, 1889, pp. 406–7

（ロンドンのランベスにあるカンタベリー大司教の裁判所の書記ロバート・オヴ・エイブスベリー Robert of Avesbury〔一三五九年初頭に死亡〕による年代記。彼は、ランベスにあるカンタベリー大司教の邸宅に勤めていた。彼の年代記は、おもにエドワード三世の軍事活動について書いており、ペストについてはあまり述べられていない。）

「この疫病はサラセン人が住んでいた土地で最初に始まり、威力を増しながら、荘園を減らし、スコットランドを含む北部の土地にまで広がり、すべての王国のあらゆる場所を襲った。突然死という打撃が大多数の人々を襲った。イングランドでは、聖ペテロの祝日（八月一日）頃、ドーセットで始まり、直ちに前触れもなくあらゆる場所に広がった。多くの健康な人々を殺し、死の印をつけられた人々は、三日あるいは四日以上長く生きることは不可能であった。ほんの少しの健康な人を除いて、誰も助からないのは確かであった。同じ日に二〇人、四〇人、六〇人の遺体が同じ土穴に埋葬された。この疫病は、諸聖人の祝日（十一月一日）頃にロンドンに到達し、毎日多くの命が奪われた。聖燭祭（一三四九年は二月二日）から復活祭（四月十二日）までの間に、猛威をふるい、毎日二〇〇以上の遺体がスミス

フィールドの隣に造られた新しい埋葬場所に埋められた。これに、ロンドン市の教区墓地に埋葬された遺体の数が加えられた。ロンドンでは聖霊降臨祭（五月三一日）の到来とともに終わり、北部では一三四九年の大天使ミカエル祭（九月二九日）頃に終わった。」

〔史料15〕ヨークにおけるペスト

Raine, J. ed. *Historians of the Church of York*, Rolls Series, 1879–94, II p. 418.

（一三七三年頃にトーマス・スタッブズ Thomas Stubbs によって書かれたヨーク大司教の年代記。彼は、おそらくドミニコ会修道士であり、イングランドにおけるペストの到達を事実よりもかなり遅れて捉えている。）

「一三四八年、大天使ミカエル祭の頃、イングランドで人間の大量死が始まった。クリスマス後の十二月三一日に、ウーズ川が氾濫し、ミカエルゲートの近くにある橋で土手が決壊し、四旬節まで続いた。そして、この後キリスト昇天祭（五月二一日）頃、ヨークで大量死が始まり、聖ヤコブの祝日（七月二五日）まで猛威をふるった。」

〔史料18〕ミューズ修道院でのペスト

Bond, E. A. ed. *Chronica Monasterii de Melsa*, 3 vols, Rolls Series, 1866–68, III pp. 35–7, 40, 72.

（ヨークシャーのイースト・ライディングにあるシトー会のミューズ修道院にて、一三八八年頃から一三九六年まで修道士トーマス・バートン Thomas Burton によって書かれた年代記。一三九六年に彼は修道院長になっている。）

「一三四九年八月中に、修道院長ヒューと修道士二二人、その他世俗の人たち六人が死亡した。八月

十二日には、一日で修道院長と修道士五人が死亡した。合計五〇人の修道士・見習いのうち、生き残った者は十人だけであった。

…イングランドに疫病が来る前、一三四七年に王国の至るところで貴族がトーナメントをして、招かれた貴婦人たちはすでに結婚しているにもかかわらず、別の男性と現れ、みだらな行いをした。」

〔史料23〕アイルランドにおけるペスト

Butler, R. ed. *Annalium Hiberniae Chronicon*, Irish Archeological Society, 1849, pp. 35–7.

（一三四八年に、アイルランド東部のイングランド人居住地〔ペイル〕に疫病が到達し、次の年には他の地域を横切るようにして進んでいった。唯一の詳細な記述はフランシスコ会修道士であるジョン・クリン John Clynn によって残されている。彼自身もペストによる犠牲者であり、一三四九年に亡くなっている。）

「一三四八年の特に九月と十月の間に、大司教や司教、その他の聖職者、修道士、貴族、その他の人々が、男性のみならず女性も、アイルランド中からテック・モーリングにぞろぞろと集まり、浅瀬を渡って聖モーリングの教会に巡礼した。何千人もの人が集まることが幾日も続いた。信仰から離れた人もいたが、実際には大多数の人たちは、その当時猛威をふるっていた疫病の恐怖ゆえに来た人たちであった。疫病は、ダブリンの近くのホウス（Howth）やドローエダ（Drogheda）で始まり、居住者のいた都市を空にして全滅させた。ダブリンだけで、八月初めからクリスマスの間に、一四〇〇〇人が死んだ。この疫病は、東部で発生し、サラセン人と不信仰者たちの間に蔓延しながら、四〇〇〇万人を殺したと言われた。疫病は、ローマ教皇庁がおかれたアヴィニョンで、その前年の一月に、教皇クレメンス

六世のときに始まった。アヴィニョン市にはすべての死者を埋葬する十分な教会も墓地もないために、疫病の死者を埋葬するための新しい墓地を聖別するように命じた。五月から七月三日（聖トーマスの御遺体移転の日）までに、五万人以上がそこに埋葬された。

前年の一三四七年に、この疫病に関係する驚くべき光景がトリポリにあるシトー会の修道院で起こった。ある修道士が、修道院長の前でミサを行っていると、洗浄式と聖体拝領の合間に、片手が現れてパンと葡萄酒を供えた布の上に次のように書いたのである。『高尚なレバノン杉は燃え立つだろう。そしてトリポリは破壊され、アッカは占領され、国境近くの住民がこの世界を征服し、土星は木星を待ち伏せして襲い、コウモリは群をなして飛ぶためにミツバチの君主をつかせるだろう。十五年以内に、一つの信仰と一つの神が現れ、その他は消滅し、イェルサレムの息子たちは囚われの身から救われだろう。ペテロの帆船は大きな波に揺らぐだろうが、逃げのびて、その日の終わりには支配するであろう。聖職者に災いあれ。たくさんの戦いとおびただしい虐殺、激しい飢餓と大量死、政治的大変動が起きるだろう。野蛮人の土地は変えられるだろう。托鉢修道会は必ずや多くの人々と争うだろう。東の獣と西のライオンは、それらの力によって全世界を支配下に置くだろう。十五年の間、全地上に平和とたくさんの作物が訪れるだろう。それから、すべての誠実な信者たちは、聖地に向かって分かれた海を越えていき、イェルサレムの町は栄光を授かり、聖墓はすべての信者たちによって名誉を与えられるだろう。この静寂のなかで、アンチキリストの知らせを聞かされるだろう。注意せよ。』

この世の始まり以来、こんなに多くの人々がそのような短い時間のうちに疫病や飢饉、あるいは他の衰弱が原因で死ぬのを今まで聞いたことがない。地震は、何マイルにも広がったが、市や町、城を破壊

し、またそれらを飲み込んだ。疫病は、住民のいる村、都市、城、町をすっかり丸裸にしたので、彼らの中で生き残った者はほとんどいなかった。この疫病は、接触感染するので、死んだ人あるいは病気の人に触れた人々は、すぐに伝染して死んだ。それらの恐怖と憎悪のために、人々は病気の人のもとを訪れ、死んだ人を埋葬するという信心深い慈善行為を行うことはできなかった。多くの人々が、脚や腋の下にできたおできや腫瘍、濃疱が原因で死んだ。他の人たちは、頭痛によって引き起こされた狂乱状態、あるいは吐血が原因で死んだ。この驚くべき年は、物事が通常の順序をはずれ、完全に矛盾することがあった。たとえば、おびただしく豊作であるにもかかわらず、同時に病人や死人が多かった。ドローエダのフランシスコ会修道士たちの間では、クリスマス前までに二五人の修道士が死に、ダブリンでは二三人が死んだ。キルケニーでは、この疫病は四旬節の間に激しく、クリスマスから三月六日までの間に八人のドミニコ会修道士が死んだ。たった一人だけが、一つの家の中で死ぬことは稀であり、たいていは夫、妻、子供たち、使用人が同じような死に方で亡くなった。

キルケニーの托鉢小修道院の修道士である私ジョン・クリンは、私の生きている時代に起きた注目すべき出来事について書いてきた。それは、私自身や信頼できる情報提供者によってもたらされたもので、注目すべき行いが、時が経つにつれて滅びないように、将来の世代の記憶から消えないように願ってのことである。全世界がこのような多くの不幸や悪意に巻き込まれるのを見て、これからやってくる死を死者たちの間で待っている私が、真実として聞いたこと、見たことを書き留めた。将来、アダムの息子の誰かが疫病から逃れ、生き残って私が始めた作品を続けることができるとしたら、この羊皮紙を遺贈する。」

〔史料24〕スコットランドにおけるペスト

Skene, W. F ed. *Chronica Gentis Scotorum*, Edinburgh, 1871, I, pp. 368–9.

（アバディーンの司祭であったジョン・オヴ・フォーダン John of Fordun〔一三六三年頃死亡〕による『スコット人の年代記』。）

「一三五〇年、スコットランド王国において大規模な疫病と大量死があった。そして、この疫病は世界中の様々な地域で何年もの間、猛威をふるった。世界の始まりから現在に至るまで聞いたことのない、あるいは記されているのを見たことのない伝染病である。なぜなら、この伝染病はその恨みを容赦なく撒き散らしていて、人類の三分の一が殺されたほどである。さらに、神の命令によって、その異常な、見慣れない形の死によって命が損なわれている。この病に倒れた人の肉体からひどい臭いが二日間続いた。この病気はいたるところで人々を襲ったが、特に中間と下層の人々に襲いかかり、有力者が罹るのは稀であった。大変な恐怖を引き起こし、あたかもライ病か有毒な蛇のように感染をおそれて、子供たちは今にも死にそうな親を訪ねるのを嫌い、あるいは親たちが子供のもとを訪れようとはしなかった。」

〔史料29〕祈願行列1

Raine, James. ed. *Historical Letters and Papers from the Northern Registers*, Rolls Series, 1873, pp. 395–7.

（ヨーク大司教であったウィリアム・ズーシェ William Zouche が、一三四八年七月二八日付でヨークにいる彼の役人に

あてた書簡。ペストの差し迫った脅威に対し、イングランドにおいて最も早い対応を示す。）

「地上の人間生活は戦争であるから、この世の悲惨さの真っただ中で戦っている人たちは、様々な出来事が次々と起きて動揺しているのは疑いない。いい時もあれば、その反対の時もある。なぜなら、全能の神が、霊的なお恵みを注ぐことによって愛する人々の力が完全に弱まっている時に、大変な数の死者、疫病、空気の伝染が今や世界の様々な地域を脅かしていること、特にイングランドではそうであることは皆知っている。これが、人々の罪によって引き起こされたことは確かである。彼らは、よき時を楽しみながらも、それが全能の神の賜物であることを忘れたためである。このため、人間の避けがたい運命である無慈悲な死を逃れることができる人は誰もいないのである。救世主の聖なる慈悲が人々に示されない限り、われわれを脅かしているのであるから、急いで神のもとに戻りなさい。神の慈悲は裁きに優り、惜しみなく与える神は罪人の改悛を心から喜ばれる。情け深く、優しく慈悲深い神が、怒りと疫病を取り除いてくれるよう祈りなさい。

そのため、われわれはあなたに以下のことをするように命ずる。ヨーク司教座付属聖堂教会やその他の修道院教会、そしてヨーク市及びヨーク司教区にあるすべての教区教会で、毎週水曜日と金曜日に、連祷をおごそかに詠唱しながら敬虔な祈願行列を行いなさい。疫病を鎮めるために、毎日ミサで特別な祈りをしなさい。そして同じように国王と教会、イングランド王国のすべての人々のために祈りなさい。こうすることで、救世主が耐えざる懇願に耳を傾けて許してくださり、自ら形づくられた創造物を救済しにいらっしゃるでしょう。そして、我々と全能の神の慈悲と神の母である聖処女マリアのおとりなしと、使徒ペテロとパウロといと気高き証聖者ウィリアムとすべての聖人たちのおとりなしを信じな

さい。もし彼らがこれらのことを敬虔に祈り、祈願行列に参加し、その他の敬虔なことを行うのであれば、神が享受した四〇日間の苦行を免除する。それで、あなたはこうした事柄が我々の司教区中で速やかに実施されるようにしなさい。」

〔史料30〕祈願行列2

Register of Bishop Ralph of Shrewsbury, Somerset Record Society X, 1896, pp. 555–6.

（バース&ウェルズ司祭であったラルフ・オヴ・シュールズベリー Ralph of Shrewsbury が、一三四八年八月一七日付で彼の教区の助祭長に宛てた書簡。年代記の記述は、八月一日までにドーセットにペストが到達したと示唆しているが、もしそんなに早くなかったとしたら、約四五マイル離れたサマーセットのエバークリーチで書かれた司教の書簡は、「隣の国」（おそらくフランス）に到達していたということを述べている。）

「全能の神は、神の座から発せられる稲妻を使って、神が悔い改めさせたいと思っている息子たちを苦しめている。この結果、破滅的な疫病が隣の国からイングランド東部に到達したので、我々が敬虔に絶え間なく祈らなければ同じ疫病がこの王国に毒性の強い手を伸ばし、居住者たちを食い尽くしてしまうだろう。

このため、我々はあなた方一人一人に命ずる。現在の状況をあなたの教会でしかるべき時に英語で説明するように、そして、すべての聖職者や俗人たちが神の御前に来て告解を行い、賛美歌を歌い、その他の慈善行為を行うようにさせなさい。告解を行い、ニネバの人々に預言されたこと、絶命しても神の裁きによって救われたこと、神の厳しい怒りから許してもらったことを思い出しなさい。あなた方は、

祈願行列の準備をしなさい。すべての修道院教会、教区教会で少なくとも毎週金曜日に祈願行列をしなさい。神の御前にへりくだって、自らの罪について告解し、敬虔な祈りでその罪を償うようにさせなさい。そうすることによって、神の慈悲がすみやかに我々を導き、人々からこの疫病と他の厳しい衝撃を取り除き、キリスト教の国々に平和をもたらし、健全な空気を送ってくださるであろう。」

〔史料31〕祈祷の重要性

Wilkins, D, *Concilia Magnae Britanniae et Hiberniae*, 4 vols, 1739, II p. 738.

（エドワード三世は、カンタベリー大司教であったジョン・ストラットフォード John Stratford に、カンタベリーの至るところで流行しているペストに対して、祈祷するよう手配を頼んだ。ストラットフォードは一三四八年八月二三日に亡くなり、祈祷を手配する責任はカンタベリーのクライストチャーチ修道院長に移った。一三四八年九月二八日付の書簡では、修道院長はロンドン司教に、南部の州にいるその他の司教たちにもこの命令を伝えるように頼んでいる。）

「神は人間の息子たちに厳しく、神は愛している人々を咎め、苦しめさせるのである。つまり、神はこの世に生きている間に様々な方法で彼らの恥ずべき行いを罰するのであり、それによって彼らが永遠に咎められることがないようにするのである。ますますイングランド王国とその臣民は堕落し、数え切れない罪を犯しているためにいろいろなところで荒れ果て、そして、イングランド王国は富を使い果たして戦争の負担によって苦しめられている。そのため、今や他の地域で広がっている疫病と哀れな死に襲われる恐れがある。

偉大なる国王エドワードは、こうした事柄を真剣に考えた結果、前のカンタベリー大司教に書簡を送

り、教会の平和とイングランド王国の平和のために、カンタベリー大司教管区全体で、全能の神がイングランド王国を疫病と死から救い守ってくださるように、祈りをするように求めた。しかし、大司教が国王の要請を実行に移そうとしたところで亡くなってしまった。このため、私は大司教が実施せずに残したことを、カンタベリーの首位教会としての権威に基づいて、あなたに命ずるのが正しいと考えた。

カンタベリー大司教管区に属するすべての司教および司祭たちに、適切なる時と場所においてミサを挙げ、説教を行うように、そして、毎週水曜日と金曜日に祈願行列を行うように命じなさい。敬虔にひたすら祈ってその他の儀式を行いなさい。そのことによって、神の怒りが鎮められ、こうした試練からイングランドの人々を救い出されるであろう。このように、あなたのもとにいる臣民及びカンタベリー大司教管区にいるその他の人々が、これらのことを熱心に行うようにしなさい。そして、あなたは、上に述べたことを行うすべての人々に贖宥を与えなさい。また、カンタベリー大司教管区の権威に基づいて、他のすべての司教たちに彼らのために贖宥を与えるよう伝えなさい。そうしながらも、これらすべてのことがあなた自身の町の中で適切に行われるように監督しなさい。

いつこの手紙を受け取ったのか、どのような行動をとったのか、次の御公現の祝日（一月六日）の前までに知らせなさい。また同僚の司教たちにも、彼らの行動について同じ日までに知らせなさい。」

〔史料32〕エクセタにおける対応

Hingeston-Randolph, F. C. ed. *The Register of John de Grandisson, bishop of Exeter*, 2 vols, 1894–9, II pp. 1069–70.

（ロンドン司教は、ただちに国王の命令を同僚の司教たちに伝えた。エクセタ司教であったジョン・グランディッソン

John Grandisson は、エクセタ司教代理に地方でとられるべき行いについて伝えている。）

「諸聖人の祝日（十一月二日）の次の日曜日に、聖堂教会で祈願行列と説教を行う時に、この書簡をおごそかに読み上げ、エクセタ市及びその近郊にいる人々に英語で詳しく説明をしなさい。司祭はおごそかにミサを執り行うこと、それ以外の人々は急いで神の御前に来て告解を行い、賛美歌を歌い、おごそかに祈り、それによって主がこれらの怒りを和らげ、神の裁きを哀れみに変え、懲罰を慈悲に変えられるべきである。同じような目的を達成するために命じる。クリスマス（十二月二五日）までの毎週水曜日と金曜日に、エクセタ市と近郊にいるすべての聖職者を呼んで集めなさい。こうした行列に参列しミサに参加した者、あるいは、その他の敬虔な祈りを捧げ、儀式を行った教区民は、神の恩恵を受けた者であるから、主の力によって、全能の神の恩寵を祝されし聖母マリア、使徒ペテロ、パウロ、すべての聖人のおとりなしを受けて、三〇日間の贖宥を与える。そして、あなたが行ったことを受割礼の祝日（一月一日）までに報告しなさい。」

〔史料33〕ラーマにおける声

Hampshire Record Office, Reg. Edyngdon, 21M65 A1/9 fo. 17.

（ウィンチェスター司教であったウィリアム・エイデンドン William Edendon が、一三四八年十月二四日付でウィンチェスターにいるすべての聖職者に宛てた書簡。）

「前例のない疫病によって、子供たちが奪われ、人々は慰めようもないほどに悲嘆に暮れている。なぜなら、聞くのも恐ろしいことであるが、市、町、村、城ではこれまで立派な人々であふれ、喜びに満

ちていたのであるが、今やもろ刃の剣よりももっと残忍で野蛮なこの疫病によって突然住民を奪われてしまったからである。その結果、誰もこの場所に入ろうとはせず、そこから逃げ出している。恐怖と荒廃に満ちた荒地になってしまっている。広い実り豊かな農地も完全に放棄され、農民たちは連れ去られてしまった。この残忍な疫病が、今イングランドの海岸地帯を襲い始めたという知らせが届いた。

このウィンチェスターの町やウィンチェスター司教区のどこにおいても、この恐ろしい死が蔓延しないように、神がそれを退けてくださるようにしなければならない。神の計画を理解することは人間の力ではできないことである。しかし、人間の肉欲が悪の深みに陥り、たくさんの罪を引き起こしたために、神は怒りをもって人々の忍耐を試し、罪を正しく罰するために人々を打ちのめしているのである。そのため、神は温かく恵み深いから、私たちが敬虔に心から神のもとで祈れば、この苦痛は防ぐことができるかもしれないので、あなた方に神に身を捧げるようお願いをする。神の御前で、悔い改め、あなた方の罪を正しく告解しなさい。告解の秘蹟を行って、しかるべき贖宥を行いなさい。毎週水曜日と日曜日にあなたの修道院で、聖歌隊席に集まって、膝まづいて詩篇第七篇と十五篇を復唱しなさい。

また、毎週金曜日に、ウィンチェスター市の広場を通って、聖職者と市民たちとともにおごそかに行列をし、これらの詩篇を歌いなさい。そして、疫病を鎮めるために、教父が定めた連祷を唱えながら行進しなさい。このため、あなた方はウィンチェスターの人々に行列に参加するように命じなさい。行列に参加する人々は、その敬虔な心で罪を悔いて、断食を行いながら頭を下げ裸足で行列を進み、出来るだけ何度も主の祈りとアヴェ・マリアを繰り返し唱えなさい。それぞれの行列が終わったら、それぞれの教会でミサを挙げ、人々が熱心に祈り、心から信念をもって救世主のお力と慈悲を固く信じれば、天

国からすぐに救いと助けを得ることができるであろう。祈願行列とミサに参加し、王国とイングランドの教会の平和、そして疫病の終息を祈る人々には四〇日間の贖宥を、他の場所で同じような祈りを行った者には三〇日間の贖宥を与えなさい。」

〔史料43〕トーナメントに関する神の非難

Lumby, J. R. ed. *Chronicon Henrici Knighton vel Cnitthon monachi Leycestrensis*, 2 vol, Rolls series, 1889–95, II, pp. 57–8.

（レスターのアウグスティヌス会修道士ヘンリー・ナイトン Henry Knighton〔一三九六年頃死亡〕による年代記で、一三九〇年代初頭に書かれた。）

「この時期、人々の間に大変な不満が沸き起こっていた。というのは、トーナメントが開かれる時はいつでもどこでも、貴婦人たちが群をなして、あたかも試合に参加しているかのように異様な男装をしている。時には、四〇人や五〇人ものそういう人たちがいて、王国の全体の中で最も華やかで最も美しい女性を代表しているのである。何色もの入り混じったチュニックを着て、腰の周りには金銀のベルト、ダガーナイフ、美しく飾り立てた馬で会場に乗りつけては、みだらな行いをしている。

彼女たちは、神をも恐れず、人々の非難を聞き入れず、結婚の契りを軽々しく結び、慎みなさいという要求に耳を閉ざしている。また、こうしたことを楽しみながらも、彼女たちは神様のおぼし召しとお力添えの特別なる支援によって、いたるところで輝かしい勝利がもたらされたということを知ろうともしない。しかしながら、すべてにおいてそうであるように、神様はこれらのことをご存知で、彼女たちが軽率にならないための救済策を与えたのだ。こうした虚栄が行なわれる時と場所に、神様は豪雨を降

らせ、雷と稲光、荒れ狂う風を吹かせて、彼女たちを散り散りにさせたのである。」

〔史料44〕一三四八から一三四九年に流行した伝染病の原因としての下品な服装

Tait, James. ed. *Chronica Johannis de Reading et Anonymi Cantuariensis 1346–1367*, Manchester, 1914, pp. 88–9.

（一三二五～四五年を扱い、匿名の修道士によって書かれた『ウエストミンスター年代記』からの記述。）

「この年は、特に書くべきいいことはほとんどない。十八年ほど前に、エノーからのお輿入れについてきた人たちがイングランドにやって来てから、イングランドの人たちは愚かにも彼らの奇異な生活様式を見習い、そのグロテスクな服装を毎年毎年流行に合わせて変えている。彼らは、昔の礼儀正しい裾の長いたっぷりとした衣服を捨てて、丈の短い体にぴったりとした実用的ではない衣服に変え、あらゆるところに穴を開けている。聖職者たちまで同じような服装をしており、異様である。女性たちは、もっと熱心にこうした流行を追いかけ、体にぴったりとした服を着て、尻を隠すためにスカートの中へと下がる狐の尻尾をつけている。こういうことに表れた高慢の罪は、将来不幸をもたらすに違いない。」

〔史料53〕イングランドにおける鞭打ち苦行者

(a) Thompson, E. M. ed. *Robertus de Avesbury deGestis Mirabilibus Regis Eduardi Tertii*, Rolls Series, 1889, pp. 407–8.

（〔史料14〕からの続き。この記述は、ロバート・オヴ・エイブスベリーが直接目撃し、書いたもの。）

「一三四九年のミカエル祭（九月二三日）頃、一二〇人以上の人々がフランドルからロンドンに到着した。彼らは、ある時はセント・ポール教会の前で、ある時は別の場所で、一日に二回、裸足で腰から

下に麻布を巻いただけの姿で行進した。彼らは、それぞれ前と後ろに赤い十字架を書いた頭巾を被り、三本の皮紐のついた鞭を右手に握っていた。それぞれの紐には、針のように尖った結び目がついていて、一人一人行進するたびに、この鞭を自分の体に打ち続けていた。彼らの四人がそれぞれの国の言葉で歌い、残りの人たちは連祷の形式で答えた。一回の行列の最中に、彼らは三回両手で十字架を作り地面に平伏した。次の人が歌いながら、平伏した人を跨ぎつつ鞭を打ち、これが行列の後ろの人まで行われると、また最初から同じように繰り返した。全員がこの儀式を行うまで続いた。終わると、彼らはいつもの衣服を身につけるが、常に頭巾を被り、手には鞭を持って、宿に引き上げた。彼らは毎晩、このような悔い改めを行ったと言われている。」

(b) Riley, H. T. ed. *Historia Anglicana 1272–1422*, 2 vols, Rolls Series, 1863–64, I p. 275.

(修道士トーマス・ウォルシンガム Thomas Walsingham〔一四二二年死亡〕による記述。)

「この年（一三五〇年）、イングランドに告解者が到着した。彼らは、外国生まれの身分の高い人たちで、自分の体に血が流れるまで歌ったりしながら激しく鞭を打った。しかしながら、彼らは間違った教えによってこうしたことをしたと言われている。つまり、ローマ教皇の許可を受けていないと言われている。」

〔史料68〕井戸への毒物投棄

J. G. Meuschen ed. *Hermanni Cygantis, ordinis fratrum minorum, Flores Temporum seu Chronicon Universale ab Orbe condito*

ad annum Christi MCCCXLIX, Leiden, 1750, pp. 138–9.

（フランシスコ会修道士ヘルマン・ギガス Herman Gigas による記述で、その年代記は一三四九年で終わっている。）

「疫病の原因について、空気が腐敗したという人もいれば、ユダヤ人がキリスト教徒を絶滅させるために、井戸や川に毒を入れ込んだという人もいる。この証拠として、毒薬でいっぱいになった鞄がたくさんの井戸などから発見されたと言われている。このため、人々は井戸や泉を使うことは出来ず、雨水や川の水を使わなければならなかった。神がユダヤ人のこの悪意を処罰しないわけがなかった。ドイツ中で、ユダヤ人が殺された。処罰されるのを恐れて、たくさんのユダヤ人が洗礼を受け、命を救われた。今でもこうしたことが続いている。人々は、貴族もそうでない人もすべてのユダヤ人が破壊され尽くすまで、こうした行為を止めないでいる。」

〔史料69〕ユダヤ人迫害

Boehmer, J. F. ed. *Fontes Rerum Germanicarum*, 4 vols, Stuttgart, 1843–68, IV, pp. 68–71.

（ドイツにあるコンスタンツの修道士 Heinrich Truchess von Diessenhoven による記述。）

「ユダヤ人の迫害は一三四八年に始まった。まず、ドイツでは、ステルデンで最初の迫害が行われ、すべてのユダヤ人が火あぶりにされた。その理由は、彼らが井戸や川に毒を投げ込んだという噂によるものであったが、のちにユダヤ人自身が白状したことで確認された。」

〔史料72〕ケルンからストラスブルグへの書簡

Strassburg Urkundenbuch, pp. 178–9.

（ケルン市当局の役人が、一三四九年一月十二日付でストラスブルグの市長や役人に宛てた書簡。）

「この予想もしない、また経験したことのないキリスト教徒たちの大量死によって、あらゆる種類の噂がユダヤ教とユダヤ人について飛び回っている。われわれの市でも、この疫病はもともと泉や井戸に毒を投げ込んだことで引き起こされ、ユダヤ人がやったに違いないという噂がたくさんの翼をつけて広まっている。こうした噂の真偽を確かめるようにと、あなた方や他の市や町に書簡を送っているところである。しかしながら、われわれはまだどこからも真偽について返信をもらっていない。

もし、大きな都市でユダヤ人虐殺が許されるなら（われわれの市ではユダヤ人が無実であることが証明されれば、虐殺を防ぐことを決定しているのであるが）、残虐行為や騒乱を招いて一般の人々の間に反乱を引き起こす可能性がある。そうした反乱が都市にとっては悲惨と破壊しかもたらさないことは、過去に証明されている。ともかく昨今の大量死は神罰が下ったためであり、それ以外の原因はない。それゆえ、われわれの市では、これまでと同様に、噂を理由にしたユダヤ人に対するいかなる迫害も禁止し、彼らを誠実に安全に保護することを決定した。あなた方も同じようにすべきであるとわれわれは考える。

ユダヤ人の迫害が起きたときに、民衆の反乱がないように対策をとるように求める。真実が明らかになるまで、あなた方の町でユダヤ人を保護し、彼らを安全に守る決定をすべきである。もしあなたの町でユダヤ人に対する蜂起が起きれば、これまでの経験では、すぐに他の町に広まることは確かであり、おもな都市はすべて、この問題に慎重に注意深く対処すべきである。」